○少年被疑者等の指掌紋採取及び写真撮影について

平成30年12月20日

道本少第2829号（生企・地・刑・交企・公1合同）

／警察本部各部、所属の長／警察学校長／各方面本部長／各警察署長／宛てみだしについては、「少年被疑者等の指掌紋採取及び写真撮影について」（平20. 12. 11道本少第2786号（生企・地・刑・交企・公1合同）。以下「旧通達」という。）に基づき実施してきたところであるが、引き続き、次のとおり実施することとしたので、所属職員に周知徹底し適正な運用に努められたい。

なお、旧通達は、廃止する。

記

第1 基本

少年被疑者等の指掌紋の採取及び写真の撮影については、刑事訴訟法（昭和23年法律第131号）、犯罪捜査規範（昭和32年国家公安委員会規則第2号）、指掌紋取扱規則（平成9年国家公安委員会規則第13号）、被疑者写真の管理及び運用に関する規則（平成2年国家公安委員会規則第9号）、少年警察活動推進上の留意事項について（平19. 10. 31警察庁乙生発第7号）及び北海道警察少年警察活動規程（平成20年警察本部訓令第10号）に定められているところであるが、この通達により事務を取り扱うものとする。

第2 取扱要領

1 犯罪少年の取扱い

(1) 身体の拘束を受けている場合

身体の拘束を受けている少年被疑者については、刑事訴訟法第218条第3項、指掌紋取扱規則第3条第1項及び被疑者写真の管理及び運用に関する規則第2条第1項の定めるところにより指掌紋の採取及び写真の撮影を行うこと。

(2) 身体の拘束を受けていない場合

ア 身体の拘束を受けていない少年被疑者の指掌紋の採取及び写真の撮影については、犯罪捜査のため必要やむを得ない場合で、当該少年の承諾を得たときに限り行うこと。

イ 指掌紋の採取及び写真撮影の要否の判断等に当たっては、事件の捜査主任官が、少年事件選別主任者の意見を聴いて、次の事項を遵守して行うこと。

(7) 少年事件の特性に鑑み、特に年少少年（14歳及び15歳の少年をいう。以下同じ。）の事件及び軽微な事件においては、その必要性を慎重に判断すること。

(イ) 少年の承諾を得るに当たっては、任意性の確保に特に配慮すること。

(ウ) 少年の心情を傷つけることのないよう、その時期、場所、方法等について慎重に配慮するとともに、その心情に著しい影響を与えると認められるときは行わないこと。

(エ) 年少少年であるときは、保護者（少年に対して法律上監護教育の義務のあ

- る者及び少年を現に監護する者をいう。以下同じ。)の承諾を求めること。
- (㊦) やむを得ない場合を除き、保護者等(保護者、少年の在学する学校の教員又は少年を雇用する雇用主若しくはこれに代わるべき者をいう。以下同じ。)の立会いを求めること。

2 触法少年の取扱い

- (1) 触法少年については、指掌紋を採取し、又は写真を撮影してはならない。ただし、触法少年事件の現場等に残された指掌紋との対照又は写真面割りによって、その少年が当該刑罰法令に触れる行為をした者であることを特定するために必要やむを得ない場合で、少年及び保護者の承諾を得たときはこの限りでない。

なお、触法少年の指掌紋の採取又は写真の撮影は、刑事訴訟法、犯罪捜査規範、指掌紋取扱規則及び被疑者写真の管理及び運用に関する規則に定める手続きによって取り扱ってはならない。

- (2) (1)の事項による触法少年の指掌紋の採取及び写真の撮影の要否の判断は、調査主任官が少年事件選別主任者の意見を聴いて行うこと。
- (3) 触法少年の指掌紋の採取及び写真の撮影並びにその要否の判断に当たっては、次の事項を遵守すること。

ア 触法少年事件の性格に鑑み、その必要性を慎重に判断すること。

イ 少年及び保護者の承諾を得るに当たっては、任意性の確保に特に配慮すること。

ウ 少年の心情を傷つけることのないよう、その時期、場所、方法等について慎重に配慮するとともに、その心情に著しい影響を与えると認められるときは行わないこと。

エ やむを得ない場合を除き、保護者等の立会いを求めること。

3 ぐ犯少年及び不良行為少年の取扱い

- ぐ犯少年又は不良行為少年については、指掌紋を採取し、又は写真を撮影しないこと。